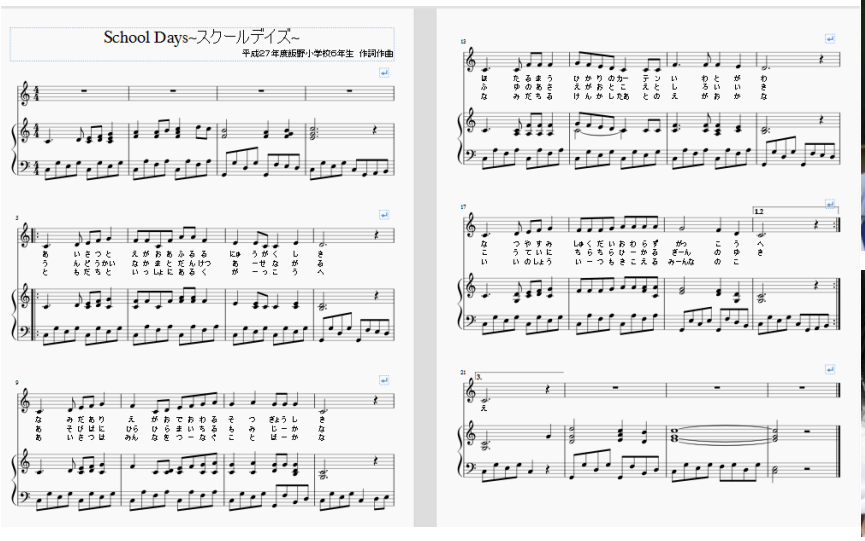
平成２７年度　教育論文

音楽のよさを感じ取り、
生き生きと表現する子どもの育成

～音楽科における効果的なＩＣＴ活用の在り方について



益城町立飯野小学校　教諭　吉田　真紀

目次

Ⅰ　研究主題　…　1

Ⅱ　主題設定の理由

1　教育の今日的課題から

2　児童の実態から

3　自分の課題から

Ⅲ　研究の仮説　…　2

Ⅳ　仮説について　…　2

Ⅴ　研究の実際　…　5

1　研究仮説１の検証

（１）表現領域について

①歌唱　６年「こころのうた」　…　5

②歌唱　６年「星の世界」　…　6

③器楽　６年「雨のうた」　…　8

④音楽づくり　２年「リズムづくり」　…１０

⑤音楽づくり　６年「旋律づくり」　…１２

（２）鑑賞領域について　…１４

①１年「おどるこねこ」　６年「木星」

2　研究仮説２の検証　…１６

（１）学級に活かす取組について

（２）学校全体や地域へ発信する取組

Ⅵ　研究の成果と課題　…１９

おわりに　…２０

≪参考文献≫

はじめに

教職について今年で１３年がたった。初任３年間は、音楽科の楽しさを学んだ。その後、中学校で音楽を担当し、１年生から３年生までの授業だけでなく、吹奏楽部顧問としてもより良い響きを求めて邁進するなど､幅広く音楽を学ぶ機会となった｡そして本校に赴任して６年目。今年は、ありがたいことに熊本県立教育センター協力員にも選出していただき、さらに深く研究をさせていただく中で、改めて音楽科の役割とは何だろうと考えている。今わかってきたことは二つある。それは、音楽科は豊かな人の心や豊かな人生を作るものだということ、そしてもう一つは、人と人をつなぐものだということだ。

まずは豊かな人や人生を作るということについてである。以前１年生担任をしていた時のこと、音楽科の学習の中で私は『日の丸』を歌って見せた。すると一人の男の子がポロポロと涙を流した。わけを尋ねると、「何か、感動した…。」とのこと。彼の琴線に触れたのが歌詞だったのか旋律だったのか、はたまた私の歌声だったのかわからないが、その子はこの音楽に出会い感動したのだ。このことがきっかけになり、あんなに苦手だった鍵盤ハーモニカの練習を頑張るようになった｡『日の丸』を弾く練習をして､家族に演奏して見せてくれたとのことだった。本人や家族の笑顔が思い浮かぶ。その後も彼は、拍やリズム、旋律や強弱など、音楽の要素（共通事項内容）を楽しみながら学んでいった。すると、ある鑑賞の授業で、リズムや速度が変化することで曲の場面がどんどん移り変わって聴こえることの楽しさに気づき､「このＣＤが欲しい！」と言うのだった。つまり音楽科は、子どもたちの音楽の出会いをより印象的なものにしたり、これから出会う音楽をより深く味わったりするための豊かな感性をはぐくむ大切な役割を担っているのだと彼の姿から学んだ。この豊かな感性こそ、これからの人生をよりよいものにしてくれるし、生き抜いていく力になるのではないかと考える。

また、私は音楽科の学習だけにとどまらず、いろんなところに音楽をちりばめて学級づくりをしている。音楽は本来人間にとって無条件に楽しいものであり人を元気にしてくれるものなのだから、その楽しさをみんなで何度も共有することで、自然と友だち同士のつながりも深まっていくのを感じる。現在担任している６年生は、４月当初歌うことが恥ずかしいと感じていたようで、確かに周囲を気にして声を出せない子も目立った。音楽のよさをいかして、いろんな場面に音楽を盛り込んで学級づくりをしていった。だんだんと子どもたちの歌声が変わっていった。２学期に入って一人の女の子が､「みんなで思いっきり声出して歌うとやっぱり楽しいよね！」と学級全体になげかけ、さらに子どもたちの歌声が変わった。音楽を通して学級の絆がどんどん深まっていくのを感じる。

今回の研究テーマの大きな柱でもあるＩＣＴ機器の活用は、音楽のよさをなくしてしまわないように、あくまで人と人とをつなぐツールであるべきだという信念のもとに、その効果的活用法を研究した。ここに３年間（研究１年目は１年生１７名、２年目はもちあがりの２年生１７名、本年度研究３年目は６年生１５名の担任、および音楽主任）の取組をまとめていきたいと思う。

益城町立飯野小学校教諭　　吉田　真紀

Ⅰ　研究主題

音楽のよさを感じ取り、生き生きと表現する子どもの育成
～音楽科における効果的なICT活用の在り方について～

Ⅱ　主題設定の理由

１　教育の今日的課題から

平成２０年１月の中央教育審議会の答申においては、音楽科（小学校）の改善の基本方針について、以下のような内容が示されている。

音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成することなどを重要視すること。そのためには、歌唱、器楽、創作、鑑賞ごとに指導内容を示すとともに、表現と鑑賞の活動の支えとなる指導内容を共通事項として示し、音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り、思考・判断する力の育成を一層重視する。また、鑑賞活動は、音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取ることができるようにするとともに、根拠をもって自分なりに批評することのできるような力の育成を図るようにする。

今日的課題としては、以上のような方針からも分かるように、児童が主体的に思考したり判断したりすること、またそれらをもとに表現することに課題があることがわかる。特に音楽科においては、歌ったり聴いたりして楽しむだけの授業ではなく、指導内容（共通事項）を明確にして児童が知覚したり感じたりすることで、多面的に音楽を捉え豊かな感性を育てること、そして、そのことから児童の思いや意図を見出し、表現していくことが大切である。このようにして、音楽科の中での思考力・判断力・表現力等を育んでいくことができると考える。

２　児童の実態から

学習指導要領音楽科目標に『音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てる』とある。『音楽を愛好する心情』と『音楽に対する感性』は、常に両輪で考えていかなければならない。『音楽を愛好する心情』とは、音楽を生涯を通じて愛好し、音楽を生活の中に生かし親しむ態度のことである。『音楽に対する感性』とは、音楽の様々な特性に対する感受性のことで、特性とはリズムや旋律、強弱、速度、音色といった共通事項内容だと言える。例えば、鑑賞曲に出会ったとしよう。単に「いいな」「好きだな」など漠然とした思いだけにとどまってはいけない。自分の心が動かされるような音楽のよさがどこにあるのか、根拠にあたるものを探求したり新たな発見をしたりすることで音楽に対する感性が磨かれ、思いや意図をもって生き生きと表現す

ることにつながっていく。さらには豊かな感性は音楽との出会いをより良いものにし、生涯を通じて音楽を愛好したいという心情が育くむと考える。そういった意味では、児童は音楽科に対する興味関心は高いものの、まだまだ音楽活動に対して受け身である。また、表現や鑑賞活動の際には、「上手に歌いたい（演奏したい）。」「明るく元気な曲だな。」など、漠然とした思いで活動している子どももまだまだ見られる。具体的にどんな工夫をして歌い（演奏）たいのか、明るく元気に感じるのはどんな音楽的特性があるからなのか、共通事項内容から音楽を捉える経験を重ね、自分の思いを明確にもって生き生きと表現する姿を目指したい。

３　自分の課題から

音楽のよさを感じ取るためには、リズム感、旋律感、速度感、強弱感、音色感などの感覚が必要である。この感覚を高めるには、リズムや旋律、速度、強弱、音色など共通事項をもとに音楽を捉える経験を音楽科の中で重ねていくことが大切である。この感覚がより一層高まることによって、思いや意図をもって生き生きと表現したり鑑賞したりする子どもの姿につながっていくのである。しかしながら、この教科最大の特徴は、音というものは目で捉えることはできないというところにある。見えないものから音楽を捉えたり思考したりすることは、なかなか困難である。さらには、ひとたび自分の思いを音楽で表現しようとするときに、専門的な知識や技能が必要になる場合も多い。こういった理由から、特に創作活動などに対する苦手意識も学年が上がるごとに増していくのが現状である。そこで、ＩＣＴ機器の、音を可視化したり記録したり再生したりできるといった特性を活かした授業づくりが効果的であると考える。

Ⅲ　研究の仮説

（仮説１）

共通事項内容に着目した授業づくりの中で、ICT 機器の効果的活用を図れば、音楽のよさを感じ取り、生き生きと表現する子どもが育つであろう。

（仮説２）

音楽科での学びを生活に活かす場の工夫をすれば、音楽のよさを感じ取り、生き生きと表現する子どもが育つであろう。

Ⅳ　仮説について

１　仮説１について

表現及び鑑賞のすべての活動において、音楽を特徴付けている要素や仕組みについて指導する内容が具体的に学習指導要領に示されている。

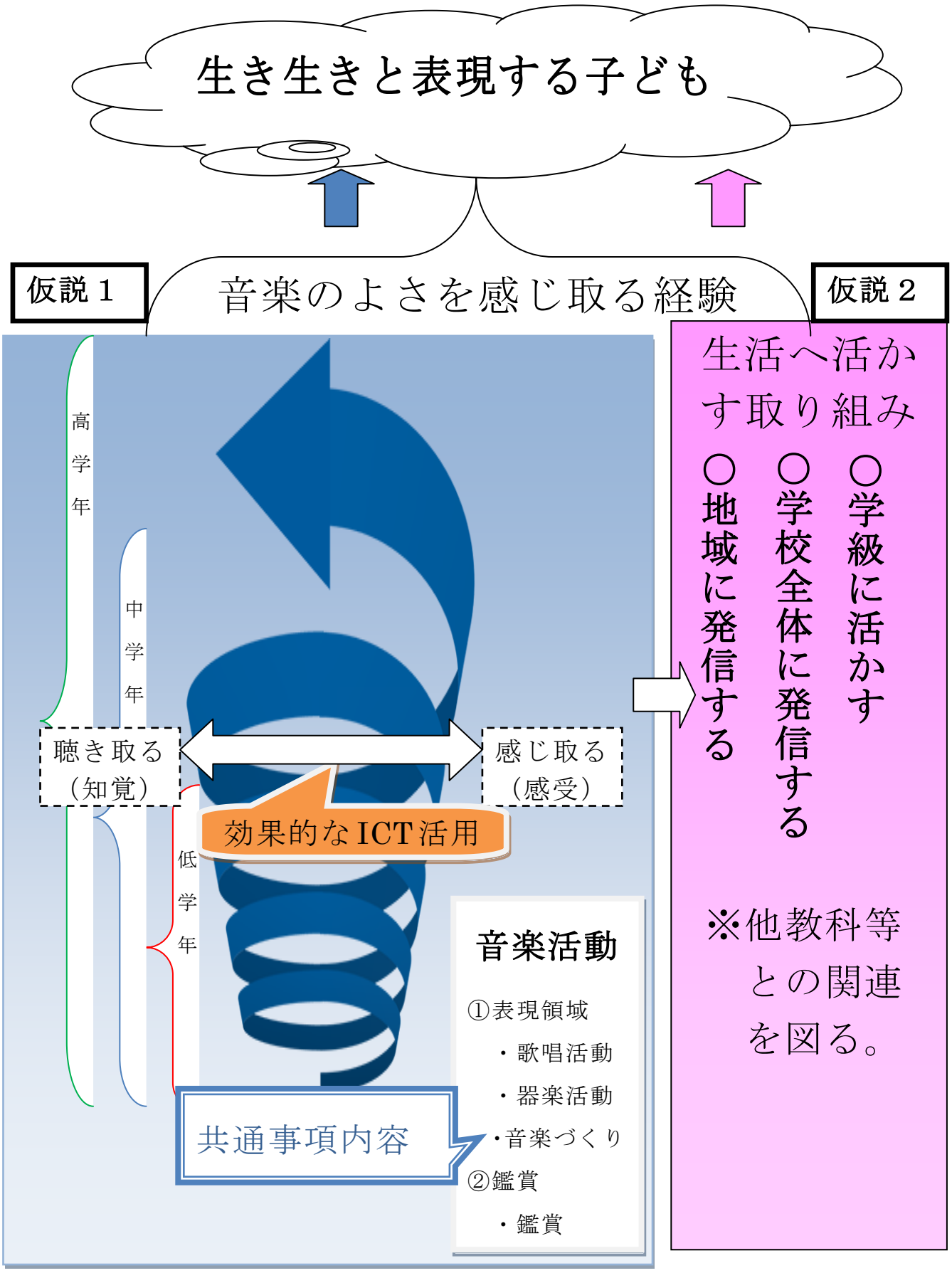
項目 学年	音楽を特徴付けている要素	音楽の仕組み
低学年	音色・リズム・速度・旋律・強弱 拍の流れやフレーズ	反復・問いと答え
中学年	音色・リズム・速度・旋律・強弱 拍の流れやフレーズ 音の重なり・音階や調	反復・問いと答え 変化
高学年	音色・リズム・速度・旋律・強弱 拍の流れやフレーズ 音の重なり・音階や調 和声の響き	反復・問いと答え 変化 音楽の縦と横の関係

小学校段階において、低学年から６年間を通じた指導内容のものを赤で、中学年から４年間のものを青で、高学年から２年間のものについては緑で示した。これらは音楽に含まれる大切な音楽的要素であり、歌唱や器楽、鑑賞など様々な音楽表現の中で繰り返し学習することを通して、より深く音楽の面白さや良さを感じとらせていくことが大切である。その際、音楽にふれることでそのよさや美しさを感じ取る『感受』と、そのように感じるのは何故か、音楽の特性（共通事項内容）を聴き取る『知覚』を、繰り返し積み重ねて感性を働かせることで、より音楽を多面的に聴くことができるようになり感性を高めることにつながる。さらには、音楽を知覚したり感受したりすることで、児童自らが主体的に思考判断し、思いや願いを持って音楽表現しようとする態度を育てることにつながると考える。このような体験をスパイラルで行うことで、自分の思いや意図をもって音楽を生き生きと表現する子どもが育つものと考える。本校では、昨年度から電子黒板と児童用タブレットＰＣが導入され、教育活動における ICT 環境は整いつつある。教材ソフトを活用したり、学習に合わせた自作コンテンツなども工夫するなどして、より深く音楽のよさを感じ取り、生き生きと表現する子どもが育つであろう。

２　仮説２について

音楽科での学びとは、音楽を「愛好する心情」「音楽に対する感性」「音楽活動の基礎的な能力」のことである。これらが常に関わり合いながら、さらには自分たちの生活に活かされていくことによって、音楽科への有用感だけでなく、より豊かな情操も養われる。学校で行われる集会活動や様々な行事、さらには地域の中など生活の中で、音楽科の学びを複合的に活かす体験を繰り返しさせる。すると、より身近に音楽を捉えたり音楽のよさを味わったりでき、音楽的な表現への楽しさや喜びを深め、生き生きと表現する子どもが育つであろう。

研究の全体構想図


生き生きと表現する子ども
仮説１
音楽のよさを感じ取る経験
仮説２
高学年
中学年
低学年
聴き取る（知覚）
感じ取る（感受）
効果的なICT活用
共通事項内容
音楽活動
①表現領域
・歌唱活動
・器楽活動
・音楽づくり
②鑑賞
・鑑賞
生活へ活かす取り組み
○学級に活かす
○学校全体に発信する
○地域に発信する
※他教科等との関連を図る。

Ⅴ　研究の実際

１　研究仮説１の検証

（１）表現領域について

①歌唱　６年「こころのうた」

学習指導要領の共通教材を扱った実践である。日本の四季や文化を表現したものが多い。本来はその季節に相応しい教材を随時指導していくが、今回は、日本の四季の美しさをより一層味わえるように、あえて春の歌の「おぼろ月夜」と夏の歌の「われは海の子」の２曲を同時に比べながら歌わせ、共通事項に気づかせていった。

学習活動（○発問や指示　Ｃ児童の反応）

１　学習の見通しを持つ。
●前回、グループごとに録音した歌声を聴いてみましょう。
Ｃもっとしっかり歌詞を覚えたい。
Ｃもっと上手に歌いたいな。

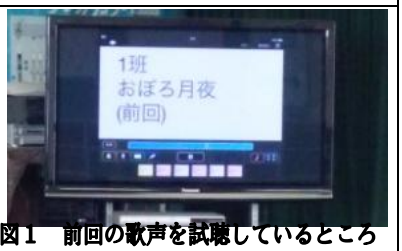


図１　前回の歌声を試聴しているところ

タブレットＰＣを使い、前回の歌声を試聴しながら、学習の見通しを持たせ意欲を高めた（図１）。

「おぼろ月夜」「われは海の子」にふさわしい歌い方を工夫しよう。

２　曲想にふさわしい歌い方を工夫する。
○曲想に合うように歌うには、どんな工夫をすればいいでしょう。

図２　タブレットに歌唱の工夫を書き込む様子

「強弱」について

感受
ここが一番盛り上がるところにしたいね。

知覚
３段目を曲の山にして、２段目途中からクレッシェンドしようよ。

「リズム」「拍」について

感受
夏らしく力強く歌いたいね。

知覚
“タータタッタ”のリズムの１拍目に足踏みしてみよう。

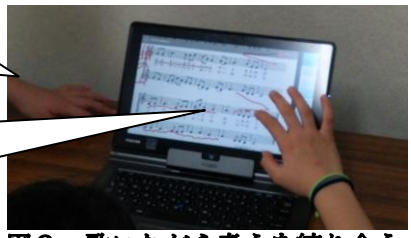


図３　歌いながら考えを練り合う

グループで１台ずつ児童用タブレットＰＣを持たせ、タブレットＰＣ上の楽譜に表現の工夫（共通事項内容）を書き込みながら繰り返し再生し歌唱させた。自分たちの思いを伝えあいながら歌唱する力を高めさせた。（図２・３）

３　全体の前で交流し合う。
○工夫したことを伝えあって、歌いましょう。
Ｃ「われは海の子」の力強いリズムを表すために、足踏みをするようにして歌います。

図4　各グループの発表

発表する際は、タブレットＰＣを大型テレビにつなぎ、工夫が見えるようにして視点を持って聴くように促した（図４）。最後に、タブレットＰＣ上で、前回と今回の発表を編集してつなげ、前時の歌声と本時の歌声を聴き比べることで、歌唱力の伸びを感じ取らせた。（図５）

○前回の歌声と比べて聴いてみましょう。

お～っ！変わった！！
○○君の歌声もよく聴こえるようになったね！

図5　前回と今回の歌声を聴き比べている様子

生き生きと表現
曲想は、リズムや強弱に気を付けると表現できるんだね。

４　各グループの工夫を全体で共有しながら歌う。
○各グループの工夫を活かしてみんなで歌いましょう。

各グループ１台のタブレットＰＣ上の楽譜に、よりよい歌唱表現にすべく「強弱」「リズム」「拍」に着目して書き込みを行ったり、何度も歌いながら書き直したりして考えを深めあう姿が見られた。私は教師用タブレットを活用して児童の学習の様子をその場で記録編集し、学習の最後に以前の歌声と聴き比べをさせた。これにより、自分たちの歌唱力の伸びを確認したり、思いをもって歌唱表現することが大切だということを経験したりすることができた。この学習が終わった後、今月の歌などを歌うような日常的な場面でも、強弱をつけて歌おうとするなど工夫して表現する姿が見られるようになった。

②歌唱　６年「星の世界」

「星の世界」は、旋律ではなく伴奏部に着目して歌唱することを通して、和音や和声の響きの美しさを味わうことを目的とした。和音が二小節ごとに変化しその構成がわかりやすく、さらには続く感じや終わる感じがつかみやすい曲といえる。図６の通り、第一次の歌唱活動にあたる。

次	時	学　習　活　動
一 星の世界（歌唱）	1	曲全体の感じをつかみ、旋律の動きに気をつけながら主な旋律を歌う。
	2	響きとその移り変わりを確かめながら和音パートを歌う。
	3	主な旋律とのバランスに気をつけながら、互いの声を聞き合って合唱する。
二 雨のうた（器楽）	4	範奏を聴いて曲全体の感じとその構成をつかむ。
	5	短調や長調の和音の響きを感じ取りながら表現の仕方を工夫して演奏する。
	6	主旋律と副旋律の重なり方の違いを確認し、バランスよく聴こえるように演奏する。
三 旋律づくり（音楽づくり）	7	創作する曲の構成について知り、歌詞に合わせたリズムを考える。
	8	和音に含まれる音やリズムに着目して、まとまりある旋律に作り上げる。
	9	作った旋律を和音伴奏と合わせて歌い、和音の響きやその移り変わりの美しさを味わう。

図6　6年「和音の美しさを味わおう」指導計画

学習活動（○発問や指示　C 児童の反応）

【第１時】
１　学習の見通しを持つ。
○「星の世界」を聴いてみましょう。
C 聴いたことがあるな。
○今回は旋律ではなく、伴奏部分を歌いましょう。

曲全体の感じをつかみながら、伴奏部分を歌えるようになろう。

２　全体で各構成音の音とりをする。
○それぞれのパートで合わせてみましょう。

第１時の最後にタブレットＰＣに児童の歌声を記録しておいた。それを第２時で試聴し、自分たちのパートの課題を明確に持たせた。

【第２時】
１　前時の振り返りをする。
○前回合唱したものを聴いてみましょう。
C まだ、音がとれていないところがある。
C もっと和音の響きをきれいにしたいな。

響きとその移り変わりを聴きながら和音パートを合唱しよう。

２　自分たちが担当する構成音パートの旋律を視覚的に捉え、練習する。
○自分たちが歌うパートの旋律をタブレットに入力し、歌う練習をしましょう。（図７）

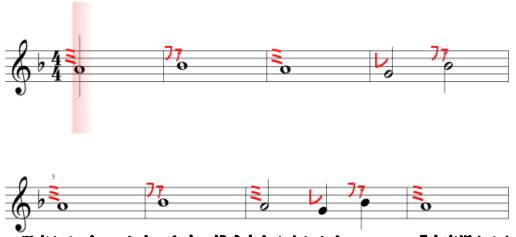


図７　児童がタブレット上で和音の構成音を入力したもの～KAWAI「音楽帳」より

「旋律」について

感受
７小節目の音がとれていないな。

知覚
音が３つもジャンプしているよ。

パートの旋律をタブレットＰＣ内の音楽ソフトに入力し、視覚的に音や旋律を確実に捉えさせた。

３　全体で合唱する。
○先生が旋律を歌いますので、みなさんは、和音になって合わせてみましょう。

「和声の重なり」
「音の縦と横」について

感受
Ⅰ→Ⅳ→Ⅰ→Ⅴ→Ⅴ７の動きがわかるようになったよ。４度は明るい感じ、最後はやっぱり１度で落ち着くね。

生き生きと表現
最後の１度は少しゆっくりめに歌って落ち着けたいね。

再度タブレットＰＣに記録し、前時の歌声と聴き比べ、学習の伸びを確かめさせた。

図８のように、実際に児童がタブレット上で作成したものも掲示し、それぞれの和音の構成音の旋律がどのように動いているかを確認させた。これらの音の縦が正確にそろうことで和声が重なり、より深みのある響きになることを体感することができた。また、Ⅰ（落ち着いた感じ）→Ⅳ（明るい感じ）→Ⅴ（続く感じ）→Ⅴ７（Ⅴ度よりにごり続く感じ）と感じ取ったことを、歌唱表現に活かしながら歌おうとする姿も見られ良かった。

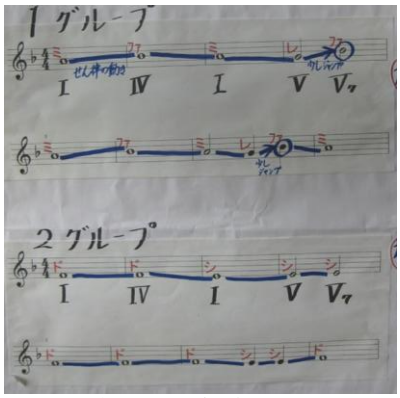


図８　児童の作成した構成音の旋律の動きを示したもの

③器楽　６年「雨のうた」

図６の第二次、器楽活動にあたる学習である。今回の学習では、主旋律部、副次的旋律部、伴奏部に分かれての合奏を通して、和音の構成について理解を深めたり、そのよさを味わったりする。伴奏部は３つの音からなる和音の組み合わせであり、それらのパートを３つに細分化しそれぞれ１音ずつのみの担当としたことで容易に合奏を楽しみながら和音への理解を深めることができる曲と言える。

学習活動（○発問や指示　Ｃ児童の反応　・支援）

【第１時】
１　学習の見通しを持つ。
○「雨のうた」を聴いてみましょう。どんな曲想ですか。
Ｃ　感受
全体的に暗い感じがする。雨が降ってドヨ～ンとした感じ。不気味だな。

全体の曲想と、曲の構成についてつかもう。

２　曲全体の構成をつかむ。
○これまでに学習したハ長調の和音とイ短調の和音を聴き比べてみましょう。
Ｃハ長調よりもイ短調が暗い感じ。メロディで、カノンのようになっているところもある。
・全体の構成をつかむために、黒板に教科書の拡大譜（図９）を提示して、全体で楽曲の特徴を話し合った。

「調」「反復」について

感受
１・３段目は、続く感じになるように５度で終わる。
２・４段目の最後はやっぱり１度。きちんと終わるように聴こえるね。

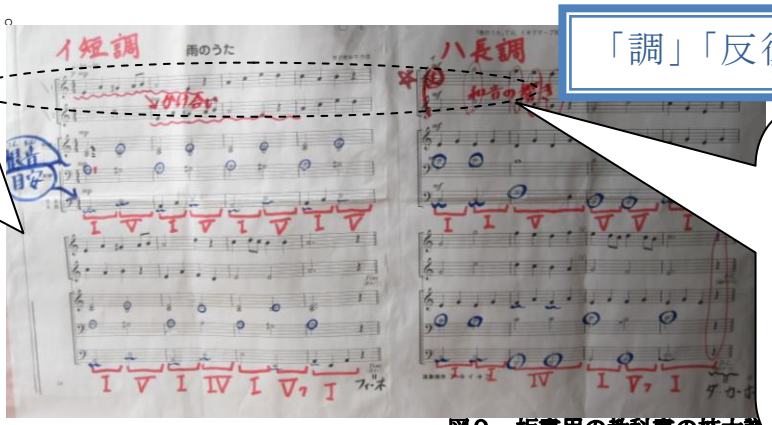
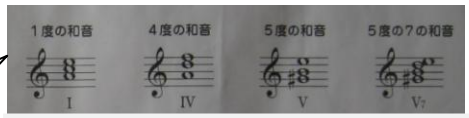


図９　板書用の教科書の拡大譜

知覚
イ短調
↓
ハ長調
↓
イ短調
になっていて、イ短調中心だから暗い感じがしたんだね。

「音階と調」について

知覚
イ短調はラから始まる短調の音階なんだな。



３　パート練習を行い、合奏する。

タブレットＰＣ上に合奏を録画し試聴することで、第１時における合奏の様子を客観的に自己評価できるようにするとともに、第２時の導入で合奏の課題を持たせるために活用した。

【第２時】
１　前時の振り返りをする。
○前回の合奏を聴いて見ましょう。
Ｃ　まだうまく演奏できていないから、もっと練習したい。
Ｃ　リコーダーのメロディが聴こえないし、がちゃがちゃした感じがするよね。

和音の響きや旋律の重なり方を感じ取りながら、バランスのとれた演奏をしよう。

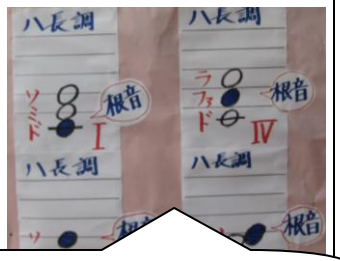
２　和音の各構成音のバランスによる響きの違いについて理解する。

ガレッジバンドの画像

ミ
ド
ラ

和音の構成音を理解するために作ったコンテンツ～iPad「ガレッジバンド」

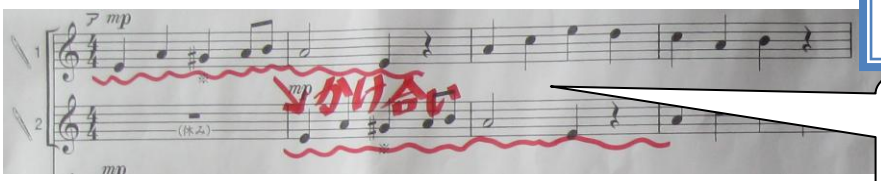
感受
イ短調１度の和音のそれぞれの音量を変えると響きが違って聴こえる。ラを大きく、ドとミは小さくすると一番響くね。



知覚
根音とベース音が一致しているんだ。

大型テレビで写し構成音一つ一つの音量を操作しながら和音の響きの違いを感じ取らせた。

３　旋律の重なり方について考える。



「旋律」について

知覚
主旋律と副旋律それぞれのパートがかけ合いになっているね。

４　パート練習を行い、合奏する。

生き生きと表現
カノンになっている部分は、主旋律も副旋律も出だしに気を付けながら、同じ音量で演奏しよう。

生き生きと表現
自分たちが根音にあたるところはしっかり音を出して、和音を響かせるように演奏しよう。

生き生きと表現
私がベース音。根音を表現して響きを支えよう。

図１０　和音に着目して合奏している様子

タブレットＰＣのカメラ機能を使って合奏の様子を録画し、大型テレビに接続して試聴した（図１０）。第１時の合奏と比べることで、根音が和音の響きを支えているということを感じとることができた。

ｉＰａｄ上のコンテンツで、和音の各構成音の音バランスを変化させながら和音の響きの違いを感じとらせた。音のバランスが良いときに和音が響くことを視覚的に捉えることが容易になり、和音を支える音（根音）やベース音の大切さに気付くことができた。合奏するパートを細分化したことで、一人ひとりの演奏を容易にしただけでなく、「ここの和音では、自分が根音だからしっかり出す。」「バスマスターのベース音をしっかり聞いて演奏しよう。」「自分は主旋律だから、後半はしっかり盛り上げるようにする。」「副旋律だけど、前半はカノン風だから主旋律に負けないようにしっかり出すぞ。」など、自分の役割を意識しながら思いをもって生き生

きと演奏する姿が多く見られた。

④音楽づくり　２年「リズムづくり」

低学年の音楽科では、手拍子や足踏みなどの身体表現をしながら音楽の拍子感やリズム感などの感覚を育てていくことが大切である。本題材では、このような従来の指導のやり方を大切にしながらも、タブレット PC を活用することで、より楽しくそして効果的にそれらの感覚や技能を身につけさせることを目的として行っている。学級を４グループに分ける。そして６枚のリズムカードの中から４枚を選び並び替えながら繰り返し演奏することを楽しみ、拍子感やリズム感を習得させていった取組である。

学習活動（○発問や指示　C 児童の反応　・支援）

１　課題意識をもつ。
○１学期で演奏した竹太鼓の発表を振り返ってみましょう。
C 上手に演奏できているな。

図11　電子黒板で振り返りをしている様子

電子黒板を使って、以前に竹太鼓の演奏を授業参観で披露した取り組みを振り返った（図１１）。今回、各グループで創作するリズムを組み合わせて一つの作品に仕上げ、学習発表会で披露することを伝えることで、活動への意欲を高めた。

自分たちのリズムをつくって、えんそうすることを楽しもう。

２　グループごとにカードを組み合わせてリズムをつくる。
○このリズムカードから何拍子だとわかりますか。
C １つの部屋にリンゴが２つだから…２拍子です。
○リズムカードを並べて、竹太鼓で練習しましょう。

「拍の流れ」について

図12　タブレットPCでリズムづくりをする

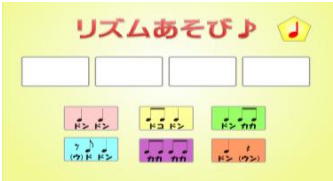
感受
かっこいいリズムだね。

繰り返す

考えを練り上げる
ステップ

試聴しながらリズム唱・手拍子・指太鼓で合わせる

感受
なんか叩きにくいね…。



６枚のカードはタップすると太鼓音で再生する。上の空欄に移動させて♪ボタンを押すと４パターンのリズムが続けて自動再生される。

作ったリズムを竹太鼓で演奏してみる

知覚
最後は「ウン（休符）」の方が気持ちよく終わる感じでいいね。

図13　決まったリズムパターンを電子黒板に入力する様子

できた～！！
つなげたらどんな風に聴こえるんだろう…。

「リズム」について

タブレットPC上で自作コンテンツを操作させ、リズムカードを自由に組み合わせたり試聴したりできるようにした（図１２）。リズムパターンが決まったら電子黒板上で操作させ、各グループの作品をつなげたものを作成した（図１３）。

3　グループごとに発表する。

図14　創作したリズムを竹太鼓で演奏する様子

生き生きと表現
リズムに合うように、かっこよく叩こうね。最後はみんなでビシッときめよう。

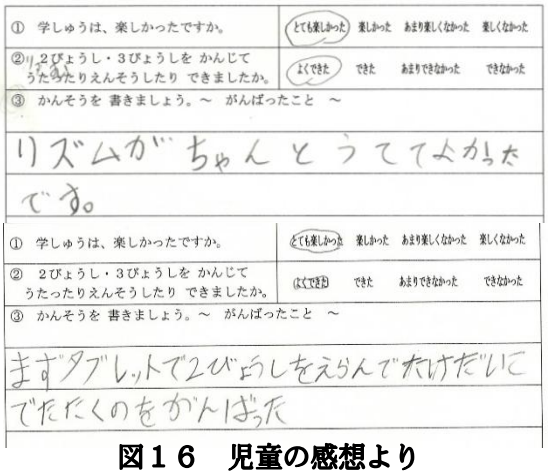
その後のグループごとの発表では、それぞれの作品をクローズアップして提示し、全体で試聴した後に実際に竹太鼓での演奏を聴かせた（図１４）。最後には、各グループの作品をつなげたものを提示し、演奏の進行を視覚的に捉えるために教師がリズムパターンを一つひとつタップしながら音を出し試聴させた（図１５）。

4　各グループのリズムをつなぎ合わせた演奏を鑑賞する。

図15　電子黒板上で4グループの作品をつなげて試聴しているところ

生き生きと表現
４班の作品をつなげたら、すごくいいね。練習を頑張ろう。学習発表会が楽しみだね！

これまでの創作活動では、リズムカードを並べることはできても、それを再現することが難しく教師を頼ることが多かった。しかしタブレット PC や自作コンテンツを活用することで、児童が主体的に活動することができた。その分、教師は児童の様子をしっかり観察し、的確に評価する時間が生まれた。最後には、全体の作品を電子黒板で再生することができ、容易にリズム遊びの楽しさを深く味わったり、図１６のように、



① 学しゅうは、楽しかったですか。　とても楽しかった　楽しかった　あまり楽しくなかった　楽しくなかった
② 2びょうし・3びょうしを かんじて うたったりえんそうしたり できましたか。　よくできた　できた　あまりできなかった　できなかった
③ かんそうを 書きましょう。～ がんばったこと ～
リズムがちゃんとうててよかったです。

① 学しゅうは、楽しかったですか。　とても楽しかった　楽しかった　あまり楽しくなかった　楽しくなかった
② 2びょうし・3びょうしを かんじて うたったりえんそうしたり できましたか。　よくできた　できた　あまりできなかった　できなかった
③ かんそうを 書きましょう。～ がんばったこと ～
まずタブレットで2びょうしをえらんでたけだいこでたたくのをがんばった

図１６　児童の感想より

思いをもって活動していたことや児童自身が伸びや達成感を感じることができていたことがわかった。この学習でできたリズムを学習発表会で披露した。自作のリズムということで、練習へも大変意欲的であったし、本番でも力強く生き生きと太鼓の演舞をする子どもたちの姿があった（図１７）。

図１７　学習発表会で披露しているところ

⑤音楽づくり　６年「旋律づくり」

感覚的に音楽を捉え楽しむ傾向がある低学年に比べ、論理的に音楽を捉えようとする傾向がある高学年。この時期の子どもたちは創作活動に対しては苦手意識が高い（図１８）。中には、「何のためにするのかわからない」など創作活動の有用感を感じられていない子どもも見られた。本来、思いや意図を明確に持って創作活動をするためには、楽譜を読んだり歌ったり書いたりする力などの楽典的内容を理解する力がある程度求められるからである。児童が無理なく、そして楽しく参加するために、その手立てとして ICT 機器を効果的に使えないか考えた取組である。図６の第三次にあたり、歌唱活動や器楽活動を通して身に付けた力を活かして和音伴奏の響きとその移り変わりに合うまとまりのある旋律づくりをする。そして和音の役割を深く理解したりその美しさを存分に味わったりすることをねらっている。『自分たちで学級歌を作る』という目的意識を持たせ、歌詞は国語科との関連も図りながら学習を進めていった。

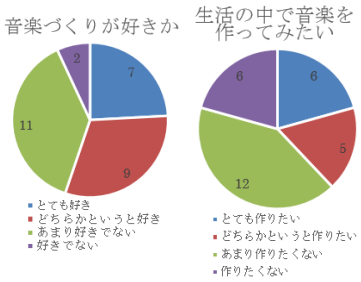


図18　5・6年生（29名）　創作活動への意識調査

学習活動（○発問や指示　C 児童の反応　・支援）
１　前時で創作した作品を鑑賞し、課題意識をもつ。 ○自分たちで作った和音伴奏やリズムを振り返ってみましょう。   図19　電子黒板で前時の振り返りをしているところ 前時で作成したリズム譜を電子黒板で見たり試聴したりして、学習の見通しを持たせたり、本時の学習への意欲を高めたりした（図１９）。 和音伴奏に合う歌いやすい旋律を考えて学級歌を作ろう。